

伊野憲治 著

『ビルマ農民大反乱 (1930～
1932) ——反乱下の農民像——』

北九州大学法政叢書 16 信山社 1998年 350
ページ

伊 東 利 勝

本書はすでに論文として発表されたものに手を入れかつ新たに書き下ろされた部分を加え、全体として以下のような構成になっている。

序

第1章 研究史と本書の課題

第2章 反乱の背景

第3章 反乱像の再構成

第4章 反乱の諸特徴

第5章 反乱下の農民像

おわりに

I 匿名の「ビルマ人」

はじめに

農民反乱研究の目的は論者によって様々だが、本書は植民地ビルマで発生した大規模な農民反乱を通して「ビルマ人」一般の「意識構造」(世界観)を読もうとする。著者はこの課題に、早くも修士論文執筆時から取り組んでいた。その後ビルマに3年間滞在し、そこでたまたま「1988年ビルマ民主化運動」に直面し、これをつぶさに観察した経験も、本研究に関わる史実の分析と解釈に遺憾なく発揮されている。

通常サヤー・サン (Saya San) 反乱と称された「ビルマ農民大反乱」は、政治史のみならず文化人類学や経済史などの分野でも、しばしば取り上げられてきた。それだけこの農民反乱が豊かな内容をもっていったということであるが、従来の研究は一部の資料のみに依拠し、主として分析方法に関する議論に終始していたのは否めない。

著者は政庁の公信、報告書類、反徒を裁いた特別裁判法廷の判決文とラングーン高等法院での控訴審判決文を包括的に利用することによって、これをあっさり乗り越えた。そして、射程を「ビルマ人農民の論理」解明にまで伸ばしている。今後この解釈をめぐって異説が出るにしても、「大反乱」を構成した各地の反乱縷述部分を圧巻とするについては誰しも異論はなかろう。それに先行研究の検討は網羅的であり、史料の博覧が徹底を極めるのは、瞠目に値する。

これまで内外で積み重ねられてきた「ビルマ農民大反乱」に関する研究史(第1章第1節)は、反乱に参加した農民を歴史の脇役から主役〔グハ 1998, 68〕の地位に引き上げ、その意識を解明する方向に進んできた。思い切っていえば、独立運動史上の位置づけであるとか、農民反乱そのものの性格規定といった関心から、いわばそれを素材にしてビルマにおける政治と宗教の関係、その中に認められる呪術的意味世界や当時の社会経済的矛盾を読み解こうとする方向への重心移動である。本書も反乱に参加した農民の行動様式から「社会通念」を抽出し、これらを農民の「世界観」(意識構造)によって有機的に関連づけつつ、最後に「農民の論理」を浮かび上げらせようとする。

人は自らの世界に遍在する価値観で外界を判断し、それに対応しつつ、行動を意味付ける。しかし、狂気の沙汰にこれが通用するとは普通考えない。平穏な日常を送っていた人々が突如暴徒と化し、あらん限りの略奪や殺戮を働く。そこには狂気のみが支配し、日常と接続する論理など存在しない。無知、理性なきがゆえの所業と捉え、そこから社会を規定する価値観やこれによって生み出される文化などは描き出すすべもない。民衆は洋の東西を問わずそうしたものの、蒙昧で前後不覚に陥るもの、という理解がある。

本書はこうした見方に果敢に挑み、狂気にもそれを貫く覚めた論理があるとし、この解明を通じて

「ビルマ人農民」の姿を理解しようとする。「生活者としての農民大衆が、非日常的な蜂起へと身を投じていく際には、それが非日常的な事件であるだけに、日常的な価値に照らし合わせて、自らの論理の正当性を繰り返し問い、熟考を重ねた上で行動に移るので」、「非日常的事件と日常の世界観（意識構造）、価値体系」のあいだには関連性があるとする（258ページ）。つまり略奪や殺戮などの行為が、彼らのもつ倫理とか道徳の観念でどのように正当化されるかを明らかにしようとする。

確かに匿名の民衆が、危機的状況下において自己の存続を求めて直接行動に出るとき、そこには文化や時代によって諸種の形が認められる。従って、その形態の分析により、文化を抽出し、反乱に参加もしくは関与した人々のみならずビルマ人一般の姿に迫ろうと本書は試みている。「当時の農民の人間像を、彼らの持つ論理の独自のメカニズムとともに明らかにし」、ビルマ人農民大衆の「血肉」とともに描く（257ページ）という。しかし何かしらひっかかる。「ビルマ人農民」とはいったい誰のことなのか。

II 指導されるべき農民

イギリス植民地下における下ビルマの農民は、20世紀にはいり不安定な米価や耕作費の上昇による負債の増大と土地喪失、インド人季節労働者の流入による小作・農業労働部門での競争激化により、とくに1920年代からは窮乏化の一途をたどった。農民の没落は反乱発生地域においても顕著であり、世界恐慌により決定的となる（第2章第1節）。また農村社会において、王朝時代には中央権力の過度の取奪に対して、農民の「保護的役割を少なからず果たしていた」（92ページ）ダヂー（thugyi）権の解体が進められ、1920年代になると、植民地支配によってもたらされた行政制度の改変が、農民にも次第に意識されるようになっていたという（第2章第2節）。

これまでの「歴史」では、民族主義運動が都市からはじまり、これがパゴダ敷地内での「土足禁止」運動や、仏教僧として政治に関わったウー・オウタ

マ（U Ottama）の活動などにより、政治意識が一般民衆や農村に及んでいったのは1920年代に入ってからとされ、本書もこれを踏襲している。しかし著者が明らかにしたように、すでに1917年の青年仏教徒連盟（Young Men's Buddhist Association: YMBA）年次総会には「15の県・郡・村の組織から代表300名以上」（101ページ）が集まり、翌年には「増税・税金徴収問題」（102ページ）も議題とされていた。これは1920年以前の農村にも政治組織が広範に存在していたことを想起せしめ、10年のミンムー（Myin-mu）農民反乱時にも、物価高や農地の喪失はイギリス植民地支配との関連で広く認識されていたこともつとに指摘されているところである〔伊東 1989〕。従って、本書が述べるように、1918年ごろからパゴダに対する不敬という「宗教問題」から、農民が政治に目覚めさせられた（100ページ）とするわけにはゆかない。

本書が詳細に描き出している農村部の自律的相互扶助組織（アティン。Athin）（111～115ページ）の問題意識を汲み取り、その活動を支援する方向で、中央のビルマ人団体総評議会（General Council of Burmese Associations: GCBA）やサンガ総評議会（General Council Sangha Shammeggi: GCSS）が闘争方針や議題を設定しえたとき、1921年10月のGCBA第9回年次総会に見られるごとく、「各地の組織から1000人を超える代表のほか、招待者・聴衆合わせて10万人以上が集まるほどになった」（106ページ）のである。従って、問題は本書が踏襲するこれまでの「歴史」にみられるようなGCBAやGCSSがウンターヌ（Wunthanu）組織を農村に作り、いかに農民を「組織化」していくかではない。「政治指導者」を農民がどう見たかである。これは農民のほうが政治的に進んでいたといっているのではない。解決されなければならない問題は農民の中にあり、彼らこそがその解決をだれよりも望んでいた。つまり問題解決へ向けての主役はあくまで農民自身であった。従って「組織化」が進むのは、農民が目覚めたからではない。農民が「政治指導者」の活動方針に違和感を持たなかったからである。

だから問題はサヤー・サンが客観的にみてどんな

人物であったかではない。農民にどう見られていたか、映っていたかである。サヤー・サンが反乱のリーダーたりえたのは、「ビルマの伝統と西欧近代政治の狭間に位置した人物……農民の論理の中に溶解していくことのできた人物」(141ページ)であったからではなく、農民に受け入れられる側面を持っていたからである。本書が明らかにしたサヤー・サン像(121~141ページ)からすれば、彼は当時の「地方指導者」と同類であった。中央政界での彼の働きは、農民にとってそれほど大きな意味を持つものではなく、ガロン・アティン(Galon Athin)の結成に動いたことによって、彼は農民に受け入れられたのである。

Ⅲ 下ビルマの反乱

ではガロン・アティンあつての「大反乱」だったのだろうか。「農民大反乱」は各地で発生した小反乱の総称である。本書は漠然とビルマでの農民大反乱とされていたものが、実際は、下ビルマの地方に限られ、それも反乱や反徒団の形成は、町から離れた僻村を中心になされていることを明らかにした(第3章)。いろいろな村落から集まった反徒が、諸種の部隊に編成され、村長宅の襲撃、略奪、租税簿の破棄、火器の強奪、政府側についた者への襲撃、非協力的な村落の焼き討ち等を行う。

従来「サヤー・サン」の反乱」と称されたこの反乱には、サヤー・サンとは無関係に組織ができあがり、蜂起している地域も少なからず含まれていることが著者の分析でよくわかる。たとえばペグー(Bago)山脈東側シッタウン(Sittaung)川流域地方やヒンダタ(Henzada)地方の場合、僧侶や地方の活動家が中心的役割を果たした。また「サヤー・サンが最も力を注いで組織化活動を展開した」地域でさえ、「一度蜂起が始まると、各々の地域指導者さらにそのもとに属す地区指揮官等が、独自に行動をとる場合が多かったのである」(157ページ)。全体としてひとつのイルミネーションを形作っても、個々の電球は個々の論理で点いたり消えたりしている。だから重要なのは個別事情の解明であることはいうまでもない。

しかしサヤー・サン組織化や指導力が、各地で発生した蜂起に意味を持たなかったとまで、著者は言い切っていない。「各地の指導者に武装蜂起という形態での反植民地闘争を選択させる一つの契機を与えたこと、かつそれが可能であるということターヤワディー、インセイン地方で実際に示したことで重要な役割を果たした。それは、蜂起の各地での発生につながり、それ以前の反英蜂起とは比較にはならないほどの大反乱を誘発する引金となった」(137ページ)という。その後1年近く無政府状態となり、反徒団の「威力はかなりのものに達」(176ページ)したピェー(Pyay)やタイェツ・ミョウ(Thayetmyo)地方では、「サヤー・サンはある種の象徴的意味をもって言及されることになった」(137ページ)と説く。

それでも実際は「個々の農民にとっては、日常から非日常に転換する際に、多くの場合サヤー・サンではなく地方指導者が重要な役割を果たした」(219ページ)のである。やはり問題は、個別地域の事情であろう。農民はいずれも長年税金の重圧のもとでもんもんとした日を送っていた。植民地初期から武装蜂起は各地で起っていたし、これが解決へ向けての最終的方法であるという共通認識はあったに違いない。しかも「大反乱」から著者が抽出した「反乱の諸特徴」(第4章)は、少なくとも1910年代にはほぼ出揃っている。経済恐慌はビルマ全土を席捲したはずなのに、危機から脱出せんとする蜂起が下ビルマだけに広がり、上ビルマの稲作地帯でこれと連動した反乱が発生しなかったのはなぜか。僻村で蜂起が起ったのは、政庁の目が届きにくかったか、それともこうした地域に矛盾が集中していたのか。反乱に参加した農民の意識を考えるうえで、このことのもつ意味は大きいと思うのだが。

Ⅳ 「良き支配者」をもとめて

農民が反乱に立ち上がる論理は何か。何をどう意味付けての行動であったのか。本書の問題関心はまさにこの点に収斂されていく(第5章)。農民の意識ではなく、「意識構造」(世界観)こそが問題であ

るといふ。人間の行動を直接動機付けている諸意識、諸観念は彼らの有する世界観によって関連付けられているのはいうまでもない。通常は、抽出された農民の行動や言葉を有機的に関連させて当該農民の世界観を描き出そうとするが、本書ではそれが目的ではない。あくまでも彼らが何をどう考えてのことなのか、の解明である。

そのためまず、N・ムルダー (Mulder) によって「広く上座部仏教文化圏における人々」を視野に入れて構築された「タイ人の一つの世界観」(261ページ) が援用され、「ビルマ人の世界観」が指定される(第5章第1節)。そして反徒の行動が、これを使って次々に整理箱に納められていく。反徒を突き動かした社会通念が「指定された世界観」との往復により、きれいに意味付けされる。たしかに本書では「反乱の事実関係、諸特徴の解明が先」(258ページ) になされてはいるが、その個々の事実の連関は「指定された世界観」で理論的に説明されている。繰り返すが、反乱に関わる事例から世界観が導き出され、これが人類学的研究により導き出されたもので確認・修正されているのではない。事例を、これとは別個になされた人類学的研究により導き出された世界観によって説明するという手順がとられている。目的が世界観の解明ではないにしても、この手法にはしっくりいかない。

たとえば著者は「税への不満」は、単なる経済的要因に還元してしまわず、「王や『超自然力を持ったサーチャー達』の出現と、密接に結びついている」(278ページ) という。つまり「農民大衆は、人頭税、地税、森林への入会権等の問題を政庁の個々の政策に起因する問題として捉えていたのではなく、常に支配者の資質の問題として理解していた」(279ページ)、とする。ここで「理解していた」というが、これはどのような具体的事例から導き出したことであろうか。税が高率で生活できないとか、「無慈悲で不当な」賦課・徴収方法の問題としてではなく、支配者の資質との関連で税そのものの不当性を問題にしたことがいかなる事例によって説明できるのであろうか。これが「指定された世界観」ではなく、現実の事象で証明できてはじめて、「指定

された世界観」の存在が有効となるはずだが。

この場合著者が鍵とするのは、「ビルマ人は個人の自由より社会秩序の安定を優先する」(268ページ) というマイケル・アウンティン (M. Aung Thwin) のステレオタイプ的見解である。「現実の社会においては、その秩序を維持する代表的存在として、父や国王といった『理想的指導者』があげられる」[伊野 1994, 216] とし、「社会の安全、安定、維持が……『良き支配者』の存在に依っているだけに、そうした指導者に逆らい、社会秩序を乱すものには、往々にして『良き支配者』の有する威力によって、制裁が下される」(270ページ) という。たしかに歴史をそのように見ればそう見えるかもしれない。しかし「ビルマ人農民」とは生来そういう人達なのか。これでは、指導されるべき農民、意志を持たない農民ということになってしまう。

おわりに

著者によれば、この「意識構造」は現代ビルマにおいても通用するとする[伊野 1994]。「指定された世界観」をもってすれば、民主化運動に立ち上がった民衆の行動はたしかにうまく説明がゆく。決して皮肉ではないが、この枠組みは用語さえ変えれば、日本社会さえも理解可能ではないかとさえ思う。しかし汎用性があるということは、別の見方からすると常にワンパターンとなり、民衆の意識や文化は何も変わらない、学ばない、成長しない、となる。

変化に注目することこそ異文化研究の意味があるのではないのかと思う。変わる部分と変わらない部分があれば、われわれは変わる部分に注目してこそ、それを知る意味がある。

さらに「真の全体像」とか「偏見を暴く」とかいったレベルの問題なのではない。どのような側面を浮かび上がらせたらその地域に住む個々人と接したとき、問題が起きないかという方法論こそが地域研究に求められていると思う。

文献リスト

<日本語文献>

- 伊東利勝 1989. 「ビルマ農民反乱の構造——1910年ミンムー反乱の事例から——」『東南アジア——歴史と文化——』(18) 山川出版社 3-40.
- 伊野憲治 1994. 「理想的支配者を求めて——ミャンマー『民主化』運動下の民衆像——」田中忠治先生退官

記念論文集刊行委員会編『地域学を求めて——田中忠治先生退官記念論文集——』ぎょうせい(非売品).

グハ, ラナヂット 1998. 「反乱鎮圧の文章」R・グハ他著 竹中千春訳『サバルタンの歴史——インド史の脱構築——』岩波書店.

(愛知大学文学部教授)